



すいせい ふうか ハレー彗星が遠日点通過

彗星といえば「ハレー彗星」という名が思い浮かびます。紀元前の昔からたびたび出現している周期彗星で、17世紀にイギリスの天文学者エドモンド・ハリー(1656-1742)が研究したことによって「ハリーの彗星 (Halley's Comet)」と呼ばれるようになりました。彗星は、通常発見者の名前を付けるのですが、周期彗星のカタログの1番目は例外的にハリーの彗星が割り当てられ、日本ではハレー彗星と呼ばれるようになりました。



1986年4月8日 オーストラリアで見たハレー彗星
たなかちあきさつえい
田中千秋撮影

彗星が有名になったのは、1910年の回帰の時です。地球がこの彗星の長い尾の中に入り、人類が滅亡するという噂が広がり、多くの人がパニックに陥ったと伝えられています。前回の回帰は1985-86年で、年配の天文ファンからは南半球へ観測のため遠征したという武勇伝を聞きます。その時は、地球との位置関係があまり良くなく、思いのほかショボかったなどと言われました。そして、周期76年のこの彗星を見ることは自分の寿命から考えてもうない、という諦めにも似た感慨を持ったものです。

それから、37年を経た今年12月9日、遠ざかる一方だったハレー彗星が遂に遠日点通過しました。遠日点とは、その彗星の軌道上で、太陽から最も遠い地点です。つまり、彗星が再び太陽に近づく方向に舵を切ったということです。

ハレー彗星が次に太陽に近づくのは、2061年7月のことです。その前後、数か月は夜空にハレー彗星を楽しむことができるはずです。その時、私は生きていれば106歳なので、あまり期待していませんが、現在小中学生の人は、40-50代の働き盛りでしょう。この記事を読まれた多くの方々が、ハレー彗星と一期一会の対面を果たされることを期待します。